

K.A.ウィットフォーゲルの中国革命論（その2）-毛沢東の台頭と第二次統一戦線の形成と崩壊をめぐり（下）-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2014-03-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 石井, 知章 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/16472

K. A. ウィットフォークルの中国革命論 (その2)

— 毛沢東の台頭と第二次統一戦線の
形成と崩壊をめぐる (下) —

石 井 知 章

はじめに

1. 農村ソヴェトの成立と毛沢東の台頭
 2. 毛沢東の虚像と実像
 3. 国民党との関係性における毛沢東
 4. 毛沢東の「湖南報告」とコミンテルンの農業政策
 5. 毛沢東主義と「日和見主義」の展開
 6. 中国共産党の発展とその主な特徴 (1927-1935年)
 7. 農村根拠地と毛沢東の革命戦略
 8. 蒋介石に対する評価の変化と毛沢東の立場
(以上が467号)
 9. コミンテルン第七回大会と抗日「民族」統一戦線
 10. 西安事件 (1936年) と段階的調整
 11. 第二次国共合作における中国共産党の政策の変化 (1937-1945年)
 12. 独ソ条約と毛沢東の「新民主主義」論
 13. 「社会主義」国家としての執政党への道 (1945-1949年)
- おわりに
(以上が本号)

9. コミンテルン第七回大会と抗日「民族」統一戦線

中国共産党の行動を解く鍵は、ここでも再び中国においてではなく、ソ連において発見される。ヒトラーとの諒解に達することができなかったスター

リンは1934年、他の方面に友人を求めはじめた。彼はいまや国際連盟へのソ連の加入を希望し、また人民戦線による同盟を可能な限り、至るところで作ろうとしていた。日本がナチス政権に近づくにつれて、ドイツから攻撃してくる危険が増大していったからである。ウィットフォーゲルの見るところ、統一戦線設立をめざす最初の措置が、1934年にフランスにおいてとられ、他の共産党もすぐ、フランスの「同志」の手本にならっていった。とくにヒトラーが1935年5月21日、反ソ演説を行なってからはそうだった。コミュニストの発言は、いまや公然と、日本と再武装されたドイツとの間の親交がソ連にとって危険なことを強調するように変化していたのである。

こうした中、明らかに新しいやり方が、極東の事態に対して発見されねばならなかった。紅軍は近代的軍事力を持たず、また長征の結果その規模が十分の一に縮小されていたがゆえに、ドイツと同時にソ連をも攻撃してくる可能性のある日本は、有効に阻止し得る相手ではなかった。1935年の暮れに、王明はソ連の指導者たちが少なくとも同年7月以降、「有効な軍事力の点からいって、紅軍だけでは日本帝国主義やその手先を打破するにはなお不十分である」というひそかに表明していた本心を、公然と口にするようになっていた⁹⁰⁾。それゆえにウィットフォーゲルは、民族統一戦線による新たな国共間の軍事的バランスを以下のように見る。

「これはまさに問題の核心であった。中国の紅軍は到底日本軍の敵でない。しかし、もし紅軍が敵でないとすれば、いったい誰が日本軍にあたるのか。答えは簡単である。国民党政府の正規軍のみが、東京の注意をソ連から逸らす戦争に巻きこむことができるのである。この結論が下されるや否や、中国のコミュニストたちは、できる限り最大の統一戦線、つまり、国民党の政府や軍隊、それにそのテロ組織である藍衣社をも包含した民族統一戦線を提唱しなければならなかったことは明らかである」⁹¹⁾。

このように、中国における第二次民族統一戦線ですら、その結成はけっして中国国内で独自に決定されたものではなく、クレムリンによって描かれた統一戦線政策を世界的に実施するという意図の下、モスクワのコミンテルン第七回大会において提案されたものにすぎない。王明は1936年秋、「共産党はコミンテルンの第七回大会の路線に基づいて、新しい政治路線を策定し、それを党の中央委員会と中央ソヴェト政府の8月1日付アピールの中で表明した」と述べ、この明白な事実を強調した⁹²⁾。コミンテルンの役員で極東専門家であるミフは1937年、この説明を補足しつつ、「その（第七回コミンテルン一筆者）大会で、同志王を団長とする中国代表团は、抗日統一人民戦線の創設を目ざし、中国共産党の新しい政策と戦術の諸原則を作り上げた」と述べている⁹³⁾。また、中国共産党の「正」史編纂者である胡喬木も1951年、紅軍がまだ長征で移動している間、毛沢東がこの問題を解決できなかったことを認めている。胡によれば、「中国侵略以後の国内情勢」における「党の政策」の決定は、1931年から1934年のあいだ、党の中央指導機関によって行なわれなかった。また、1935年という長征の期間中、毛沢東によってもなしとげられなかった。それができるようになったのは、コミンテルンが採択した、ファシストに対する統一戦線の修正された政策に助けられて、1935年8月1日、中国共産党が宣言書を発表して統一戦線を呼びかけたとき、及び長征終了後の12月、中国共産党の指導者たちが当面の情勢を検討したときであったという⁹⁴⁾。

ウィットフォーゲルの見るところ、こうした胡の説明は、第二次民族統一戦線への政策的変更がコミンテルンの影響の下に行なわれた点において一致している。「その第一は、第七回コミンテルン大会の役割を強調し、第二は王明の特別の貢献を強調し、第三は、毛沢東が長征の終る以前には、政治情勢の分析者として、また政策の決定者として、不利な立場におかれていたという理由を説明しているのである」⁹⁵⁾。

ここでウィットフォーゲルは、第七回コミンテルン大会で、中国共産党の

政策についてどのようなことが起ったのかについて検討を試みる。中国代表は開会式の7月25日、中国共産党の挨拶を述べたが、彼はそのなかで、「反革命の国民党」を無条件に非難した。だが、ウィットフォーゲルの見るところ、「7月29日、30日、31日の三日間に、コミンテルンの活動の報告に引き続き、中国代表団によってさらに三回演説がなされたが、それらはいずれも同じ調子のもので、7月25日の演説以上に、政治路線の変更を示唆するようなものはなにもなかった」⁹⁶⁾。つまり、コミンテルンの立場とは異なり、中国共産党本来の「独自の」政治判断とは、依然として国民党を非難する「反国民党」の立場にあったということである。

この会議の演説の立役者ディミトロフが8月2日、長時間にわたって新しい統一戦線政策とその適用について説明した。この問題に関して、彼はとくにいくつかの国の共産党の名を挙げつつ、米国に七節、英国に四節、フランスに一二節、インドに一節、及び中国に二節を費した⁹⁷⁾。彼は中国についての論評で、それまで数年来とられてきた公式路線について繰り返し言及し、「中国ソヴェトのみが、反帝国主義勢力を中国人民の国家防衛のために結集しうる、統一センターとして活動することができる」と指摘した。ディミトロフはさらに、「したがってわれわれは、自国と自国人民を救うため真に戦おうとする、現存するあらゆる組織・勢力と力をあわせて、日本帝国主義とその中国人の手先どもに対する、最も広汎な反帝国主義戦線を作るのに、勇敢な中国の兄弟党が揮った指導力を高く評価するものである」と続けている⁹⁸⁾。

だが、新たな統一戦線がどの程度包括的なものになるのかという点については何も言及しなかったし、またその拡大された抗日統一戦線に包含される「組織勢力」の性格についても何も触れなかった。モスクワは中国共産党に対して統一戦線の主導権をとれと主張したが、「四川省にいて国民党の軍隊との困難な戦いに巻きこまれていた中国共産党にとって、この新しい路線は呑むことのできない多くの難点があったのであろう」とウィットフォーゲル

は分析している。

中国代表団の団長王明による8月7日の演説は、ディミトロフの構想に対する中国人としての最初の反応であった。その長い演説の中で、新しい型の民族統一戦線に触れつつ、王明は次のように述べている。

「日本帝国主義者に対する武装した人民の民族革命闘争を組織し、これを有効に遂行するために、絶対無条件に必要なことは、単に労働者農民の紅軍のみならず、また単に革命的な考えを持った勤労者のみならず、ときには動揺したり逡巡したりする各種の政治・軍事勢力をも、この闘争に参加させることでなければならぬ。（中略）私は、わが党が、われわれの肯定的、及び否定的経験を考慮に入れ、またわが人民の国家的存在が脅威を受けているわが国の現状を考慮に入れ、わが中国人民がこの基礎に立って、帝国主義に対して共同闘争を行ない、われわれの祖国を救う目的をもってできるだけ早く現実的に団結すべく、今こそ反帝国主義的人民戦線の戦術を最も大胆な、最も広範な、かつ最も有力な運動に発展させなければならないと考える。（中略）どうすればこれらの戦術が中国共産党によって大きく発展させられるのか。私の、そして中国ソヴェト政府もふくめた中国共産党中央委員会の意見では、全国民、すべての党派、軍隊、大衆組織、及びすべての著名な社会的、政治的人物に対して、われわれと一緒に、国家を防衛する全中国統一人民政府を組織するよう、共同アピールを発すべきである」⁹⁹⁾。

このように王明は、武装した労働者農民が反帝国主義的人民戦線として、国民党ではなく、中国共産党によって組織されることを望んでいたことが理解できる。だが、ウィットフォージェルの見るところ、もしこれらの言葉が他に何ごとかを意味していたのだとすれば、それは王明がコミンテルンとともに、中国共産党が打ち出してくれることを望んでいた「宣言の輪郭」を描い

ていたということである。とはいえ、ここで重要なのは、この時点ではまだこのことは既成事実にはなっていなかったという点である。

ウィットフォーゲルによれば、この第七回コミンテルン大会では王明のあと、三人の他の中国代表がディミトロフの演説に言及した。三人とも通常の言葉で、「分派主義」と戦って統一戦線を拡大することの必要性を強調したが、彼らのうちだれ一人として、直近の中国共産党のアピールに言及したものはいなかった。それだけでなく、二番目の演説者（沈元生）は、王明の8月7日の提案にも、「8月1日付」のアピールの趣旨にも相反する論旨を述べていた。すなわち沈は、とくに藍衣社を中国のファシズムの代表であるとして攻撃し、「全中国人民の最悪の敵」であると主張したのである¹⁰⁰。さらに、第三の演説者（王榮＝呉玉章）は、中国共産党は「勇敢に反帝国主義、反国民党統一戦線を推進しなければならない」と訴えた。彼は党の路線を大きく変える必要性を認めず、中国共産主義運動の成果は「ソヴェトと紅軍が統一戦線戦術を正しく適用する能力のあった事実を証明するものである」と指摘した¹⁰¹。

以上が第七回コミンテルン大会において、中国の代表が行なった、実質的に最後の演説のあらましである。だが、ウィットフォーゲルが指摘したように、ここで重要なのは、「この演説が行なわれた日、すなわち8月11日まで、中国の代表たちが――そして知り得た限りにおいては、その他の代表たちも――8月1日に出された統一戦線のアピールについて、何も言及しなかった」という事実である¹⁰²。しかも、「全中国人民に対する抗日救国のアピール」は、中国共産党や中国ソヴェト政府の、それ以前の多くの重要な宣言文の場合と同様に、毛沢東や首脳部の同志たちによって署名されていない。ただ、「中国人民ソヴェト共和国中央執行委員会」と「中国共産党中央委員会」という署名があるだけである¹⁰³。このアピールの内容は、8月7日の王明による演説の内容にきわめてよく似ており、重要な箇所が彼の構想とほとんど同じであることからしても、「その背後にコミンテルンの存在があったこと

はほぼ確実である」とウィットフォーゲルは見ている¹⁰⁴。

毛沢東がその一年後、長征の期間中に起ったことをスノーに話した際、彼は1935年8月の統一戦線のアピールについて言及していなかった。またスノーが延安で入手した情報に基づいて長征の話をさらに詳しく書いたものの中で、このアピールについては言及されていない¹⁰⁵。スノーが延安を去って北京に行く少し前の会談で、毛沢東はアピールについて次のように語ったが、それはウィットフォーゲルの見るところ、「発表を欲しての発言」である。すなわち、「共産党は1935年8月以来、声明書に基づいて、抗日の目的のために、中国のすべての党が団結することを主張してきた。（中略）コミュニストたちは、彼らの統一戦線の提案が、南京側の強い関心を引くようになると考えていた」¹⁰⁶。つまりその際、「8月宣言にそれとなく言及することは、このような統一戦線を前から共産党が主張していたという証拠として役立つ」と見られていたために、このような意図的な操作が行なわれたということである。

ウィットフォーゲルによれば、『毛沢東選集』には、たしかに毛が承認したとみられるこの演説についての歴史的注釈の前文がついているが、ここでも「8月のアピール」は素通りされている。この注釈は、1935年1月の遵義会議から紅軍の陝西到着、及び1935年12月の瓦窯堡会議へと飛んでいる。党の指導者たちは、このときはじめて「政治戦略の諸問題について系統的に検討することが可能だと知ったのであって、その全面的な分析がこの（毛沢東一筆者）報告のなかでなされているのである」¹⁰⁷。

それゆえに、ウィットフォーゲルはここでもまた、「このような証拠によって判断すると、第二次統一戦線を結成するという、中国共産党の運命を定めたこの決定は、元来中国において発案されたのではなく、モスクワで発案されたものであり、また新たな同盟を作る重要な最初の呼びかけは、モスクワのコミンテルン本部の命令——文字通りの命令——によるものであったことは疑う余地がない」と結論づけている¹⁰⁸。

10. 西安事件 (1936年) と段階的調整

新しい中国政策を立案したモスクワは、慎重にその発展を指導していた。1935年の後半から1936年の前半にわたって、コミンテルンの執行委員会主席団成員となっていた王明は、中国共産党の新路線をその指導者たちに説明した。だが、ウィットフォーゲルの見るところ、この路線をとらせるには明確な説明が必要であった。瓦礫堡会議 (12月27日) における演説で、毛沢東は国民党政府との同盟に入る意図を示さず、依然として強く蒋介石に反対していた。日本の侵略に当面して、国民党は必ずや分裂する、あるいは少なくとも分裂の可能性がある」と毛沢東は考えていたのである。毛沢東は、新しい同盟が「共産党と紅軍の指導権の下に」作られなければならぬと主張しつつ、新しい統一戦線政府は「非封建的な私有財産」は没収しないと約束しながらも、郷紳 (gentry) や地主階級に対する敵愾心を改めて公けにしていた¹⁰⁹⁾。

1936年3月以降、事態は急速に動いた。まず斎藤実が2月26日、超国家主義的日本将校の一团によって暗殺された (二・二六事件)。モスクワはこれを、ソ連に対する攻撃の新たな準備行動と解釈した。そこでコミンテルンの指導者たちは、中国共産党に対して、日本への軍事行動を開始させるために強い圧力をかけることとなる。毛沢東は1936年3月、インタビューの中で、蒋介石との合意が日本に対する武力抗戦に発展するならば、統一戦線の可能性があることを明らかにした。この毛沢東の三月声明は『選集』には載っていないものの、ウィットフォーゲルによれば、それは「もし蒋介石が本当に抗日戦争に乗り出す気なら、中国ソヴェト政府は、日本に対する戦いの庭で、彼に友好の手を差しのべるであろう」という趣旨のものであった¹¹⁰⁾。また毛沢東は、同年9月、南京との統一戦線の結成が実現した際には、非共産党地域において行なわれている諸法規、とくに土地法を認める用意がある

と述べていた¹¹¹⁾。このように、コミュニストたちは、その目的、すなわち、南京をして日本に対する全面的な戦争の実行を決意させるために、きわめて大きな譲歩をしたのである。

日本がさらに中国の領土を蚕食するに及んで、蒋介石はその態度を硬化させたが、それでもなお公然たる戦争に入ることを躊躇していた。ウィットフォーゲルによれば、彼のこうした態度は1936年11月、ドイツと日本が防共協定を締結した時も変らなかつたし、12月のはじめ、日本に対する戦闘を熱情的に叫んでいた張学良將軍に会うために、陝西省の首都西安に向かったときも変らなかつた。

蒋介石が張学良に逮捕（「誘拐」）された西安事件については、これまでも数多くの歴史家によって語られている。たしかに、蒋介石は周恩来の介入によって、数日間の交渉後には釈放されたものの、ウィットフォーゲルの見るところ、クレムリンがなぜこの解決を希望したのかについては容易に理解できる。というのも1944年、モロトフがパトリック・ハーレー將軍との会談で明らかにしたように、「モスクワが蒋介石の釈放に決定的な役割を果たしたことを率直に認めていた」からである¹¹²⁾。ここで蒋介石は、何ら条件なしに釈放されたと主張しているが、「張学良、及び周恩来と蒋介石との会談が新しい統一戦線と抗日戦争に集中していたことは確実である」とウィットフォーゲルは見る¹¹³⁾。実際、西安出発後、拘禁の当の責任者だった両將軍に直ちに意向を伝えた声明書のなかで、蒋介石は政策全般についてははっきり言及してはいないが、「すべての約束は守るし、行動は断固としてとる」と述べている¹¹⁴⁾。

この文章の意味は、その二日後、毛沢東による「蒋介石の声明についての声明」の発表の中で明らかになる。毛沢東は、蒋介石が保留したことを躊躇なく明らかにした。彼は、国民党の指導者たちが活字にされるのを嫌ったに違いない西安交渉の具体的な事実を一般に公表した。「西安で蒋介石は、張学良、楊虎城、及び北西地方人民（すなわちコミュニスト）の対日抗戦の要

求を受け入れ、その手はじめとして、内戦に従事している軍隊に陝西省、及び甘肅より撤退するよう命令を下した」と毛沢東は暴露している¹¹⁵⁾。毛沢東によれば、さらに蒋介石は、(1)親日派を追放し、抗日分子を受け入れて、国民党と国民党政府を改組し、(2)上海の愛国的指導者、その他すべての政治犯を釈放し、人民の自由と権利を保証し、(3)「コミュニストを皆殺しにする」政策を止め、日本に抵抗する紅軍と同盟し、(4)日本と戦い、国家を滅亡より救う方針を決定するため、すべての党、団体、軍隊の救国会議を招集し、(5)中国の対日抗戦に同情的な諸国との協力関係の確立を受諾した、としている¹¹⁶⁾。

蒋介石は、このような暴露の内容を否定したが、まもなく毛沢東がその声明のなかで挙げた条件のいくつかを実際に行い、またその他の措置の実行にも取りかかった。このことは、国内的には新しい統一戦線での中国共産党との協力を、国際的には日本との戦争とソ連との同盟を意味していた。つまり、同じコミンテルンの指導の下とはいえ、第一次国共合作とは決定的に異なって、今や実質的には、国民党は共産党に対して「指導的地位」を与えつつ、再度、統一戦線を結成することに合意したのである。

11. 第二次国共合作における中国共産党の政策の変化 (1937-1945年)

1937年から1945年までのあいだ、ソ連の立場は二つの事件(1938年のミュンヘン条約と1941年のヒトラーの攻撃)によって大きく弱められたが、独ソ条約とスターリングラードにおけるソ連の勝利という二つの事件によってとりわけ強化された。この四つの条件において、モスクワの国際的地位の変化は、延安政権の政治的路線を大きく変えていった。こうした国際情勢を背景に実施されたのが、1937年から1945年まで続いた、第二次統一戦線(国共合作)である。

ウィットフォーゲルによれば、新しい統一戦線を結成する必要がより緊要となるにつれて、中国共産党は、国民党の幹部たちからひどく嫌われていることを悟ったがゆえに、彼らの「革命的土政策」を放棄する用意のあることを繰り返し公言していた。コミュニストらは、大幅に譲歩する用意のあることを示しつつも、1927年の後半には、中国の民族革命で自分たちが「指導者」でなければならないと主張した。当然そうあるべきことを示すのに、毛沢東は1937年5月3日、「それは中国の歴史が証明した法則である」とまで主張しはじめたのである¹¹⁷⁾。毛沢東によれば、「中国のブルジョアジーは経済的にも政治的にも無気力なので、一定の条件下において、帝国主義や封建主義との戦いに参加しても、逡巡したり他人を裏切ったりする。したがって歴史は、そして中国の反帝国主義、反封建ブルジョア民主主義革命は、ブルジョアジーの指導の下では完成されず、プロレタリアートの指導の下でのみ完成されることをはっきりと示している」¹¹⁸⁾。そして毛沢東は、「今日のような状態では、プロレタリアートとその党の政治指導がなければ、抗日民族統一戦線は結成できないし、平和と民主主義と武力抵抗は達成されないし、祖国は防衛できないし、統一民主主義共和国は実現しない」と結論づけた¹¹⁹⁾。

その数日後、毛沢東は再び、プロレタリアートが「指導権」をとる必要性について語った。彼は日中戦争が勃発する直前の1937年7月に完成した論文『矛盾論』のなかで、同じ意見を繰り返した¹²⁰⁾。さらに彼は、1937年11月12日の声明のなかでも、それと同じ考えを表明したのである。その日彼は、「統一戦線においては、プロレタリアートがブルジョアジーを指導するのか、あるいはその反対なのか」という設問をしたあと、ブルジョアジーによるプロレタリアートに対する「指導」を否定しつつ、もし国民党が「共産党を自分たちに引きつける」ことになれば、共産党は、「国民党の地主、ブルジョア独裁と部分的抵抗の水準に低下することをよきなくされる」と述べた¹²¹⁾。

ウィットフォーゲルの見るところ、モスクワは1936年から1937年にかけて、日本を多忙にしておくために、中国での戦争を、いわば「早天に慈雨を期すように」渴望していた。1938年9月29日のミュンヘン会議後は、この戦争の必要性は「絶対的に」なった。ミュンヘンで、英国やフランスの政治家たちはヒトラーに対して中部ヨーロッパで大きな譲歩をし、彼に対して東ヨーロッパに進出する青信号を与えたのであった。ついで起ったドイツのチェコスロバキア進駐の結果として、露仏同盟はその意義の大部分を失ない、ロシアはほとんど完全に、ヨーロッパにおいて孤立するに至ったのである¹²²⁾。それゆえに、ウィットフォーゲルは当時の状況を次のように分析する。

「モスクワの立場にとって、これらは恐るべき新事態の展開であった。もしヒトラーがソ連を攻撃し、日本が南京との合意に達して、この戦争でヒトラーに加担すれば、世界共産党の大要塞は、まさに最大の危険に当面することになる。したがって共産党の最高戦略家たちにとって、日本に対する中国の戦争を最大限に維持させることが、死活の重大問題になった。これが1938年10月12日の中国共産党拡大中央委員会総会において毛沢東が行なった演説の目的であったことは明らかである。この演説が、直ちに重慶において発表されたことには理由があり、またこの演説の大部分が、今日中国のコミュニストたちを大いに当惑させているのにも、それなりの理由があった」¹²³⁾。

つまり、ここでもまた、中国をとりまく国際政治という大状況を決定していたのはモスクワであり、そのための手段として日中間の戦争が巧妙に利用されたということである。では、ミュンヘン条約後の危機に対して、当事者である毛沢東はいかなる反応を示したのか。彼は日中戦争が最初の段階を経たことについて、ある程度「面子」を保つ論評を試みたあと、最後に問題の核心に触れた。それは、「ドイツ、イタリア、日本のファシスト諸国」の力

の増大、「ドイツによるオーストリア、チェコスロバキア侵略」、及び最近の「ミュンヘン協定」についてであった¹²⁴⁾。ウィットフォーゲルの見るところ、この新しい事態に即応した毛沢東は、「民族統一戦線を強化、拡大し、その発展を高度に盛り上げる」ことを目的とする中国の新政策を提案したのである。それは消極面では「すべての党がその相互間の摩擦を最少限度に少なく」とするとともに、積極面においては、「相互間の緊密な関係を作らねばならない」とする内容であった¹²⁵⁾。

実際、毛沢東は、蒋介石、及び彼の政権と緊密友好的関係を作るためにできる限りのことをした。コミunistたちは1927年から1936年まで、蒋介石のことを「軽蔑的な」呼び名で呼んでいたが、1936年には、人を蔑むような言葉を加えずに単に「蒋介石」と、ついで蒋介石「先生」と呼ぶようになった。さらにミュンヘン条約後の毛沢東は、蒋介石「総統」と尊称するまでに変化していった。また、毛沢東は1937年には、なお国民党を「憎むべき地主と資本主義独裁の手先き」と画き出していたものの、ミュンヘン条約後は、「古い腐敗した伝統は崩壊して、新しい人民の進歩的勢力が成長し、進歩と発展のための偉大なる民族戦線が完成しつつある」と国民党との友好ムードを演出していた¹²⁶⁾。

この民族統一戦線の中であって、国民党は以前の革命はなやかなりし時代のように、はなばなしく活動していた。毛沢東によれば、「国民党はその輝かしい歴史の中で、清朝を倒し、中国共和国を建設し、袁世凱と戦い、共産党と統一戦線を結成し、新しい農業政策を導入し、とくに1927年の偉大なる革命を鼓舞した」¹²⁷⁾。当時の状況をめぐり毛沢東は、「蒋介石総統と国民党の不退転の進軍と政治の分野におけるますます増大しつつあるその進歩性に深い感銘を受けた」と媚びるほどであった¹²⁸⁾。

国民党は日本に対する抵抗をはじめたが、引きつづき抗日の大黒柱であった。「国民党がなければ、抗日戦争のために大衆を動員し、かつこれを維持することができる」とだれも考えることはできない¹²⁹⁾。実際、表面的には共

産党が「指導権」を握っていたとしても、実質的に抗日同盟の指導者となっているのは、中国共産党ではなくて、国民党の方であった。1937年の毛沢東の声明によれば、「歴史の法則」が共産党の「指導権」を不可欠にしたことになってはいたが、いまや毛沢東は、「有能な蒋介石総統の指導のもとに」中国がはじめて日本への抗戦に乗り出したとし、さらに「今日国民党は偉大なる抗日戦争を指導している」とまで持ち上げたのである¹³⁰⁾。また「共産党が政治的分野において第二位にある」点を指摘して毛沢東は、「われわれは（統一戦線で）国民党が指導的役割を演じていることを疑念なく認める。われわれが蒋介石総統と、彼の指導下にある中央政府と国民党を強く支持するのはそれがためである」と蒋介石と国民党を讃えた¹³¹⁾。

実際、国民党と中国共産党との当時の関係はきわめて有益かつ進歩的であったがゆえに、毛沢東は自信をもってこの関係が戦後も継続することを期待しつつ、「戦後、両党は同じ運命を分かち合うことによって強く成長するが、それがまた、結合をさらに継続する素晴らしい基礎になるであろう」と述べた¹³²⁾。

両党をより緊密に結合させるために毛沢東は、もし国民党が承知するなら、「コミニストは公然と国民党に加入してもよい」し、その際、第一回国共合作の時と同じように、「国民党に加入するコミニストの名簿はすべて、党の指導機関に手渡される」と約束した¹³³⁾。だが、その後中国共産党は、「国民党員が共産党の組織内に入ることを認めるわけにはいかない」と、前言とはまったく裏腹のことを付け加えたのである¹³⁴⁾。とはいえ、ウィットフォーゲルによれば、すでに第一次国共合作で苦い経験をしていた国民党の指導者たちは、「このような両刃の提案にだまされはしなかった」という¹³⁵⁾。

いずれにせよ、この二つの党は「互いに他を害しあうような運動や行動はいっさい行なうべきでない」と毛沢東が考えていたのは事実である¹³⁶⁾。とりわけ毛沢東は、「われわれは国民党の同志に、国民党内にわが党を拡張したり、党の細胞を作らないことを正式に宣言する。われわれは、民族統一戦

線の組織がどのような形態をとろうとも、この政策を忠実に守る」と高らかに宣言していた¹³⁷⁾。戦争中、このような措置はお互いの信頼感をそれなりに強めていたし、遠い将来のために毛沢東は、中国のあるべき姿を孫文の「三民主義」の原則にしたがって描きはじめてもいた。その構想によると、「三民主義」の原則による平等、普通選挙に基づいた「中央集権的民主主義」の共和国が作られることになっていた。その共和国では、「私有財産権は否定されないが、労働者は職を与えられ、労働条件は改善される。農民は土地の所有者となる。そしてこれが、われわれが民主主義共和国と呼ぶ時の国家のあるべき姿である。（中略）それは、ソヴェトにも、社会主義国にもならない」¹³⁸⁾。

この毛沢東による演説の趣旨に沿って、中国共産党中央委員会は、1938年11月6日、いくつかの決議案を採択したが、その意図は「三民主義」の三原則を再確認しつつ、国民党の「指導」に全面的に服すとした内容の蒋介石あての電報によく表れている¹³⁹⁾。

11月6日に採択された中国国民・軍・国民党、及び共産党員に呼びかけた別の宣言文でも、共産党中央委員会は、「抗戦を指導したわれわれの指導者蔣総統に対して、鄭重なる挨拶」を送っている¹⁴⁰⁾。同宣言によれば、「全国の各軍隊は、蒋介石総統の統一指揮の下に行動し、秩序と規律をもって、全国的抵抗の長期闘争を遂行しなければならない」¹⁴¹⁾ というのである。

ウィットフォーゲルの見るところ、たしかに中国共産党は新しい統一戦線の発足にあたって、蒋介石の中央政府（南京）とその軍事委員会の「指令」をそれぞれ受けることを約束していた¹⁴²⁾。だが、この初期の保証は、コミュニストによる「指導権」の主張や、社会主義の展望図、すなわち、「わが民主主義共和国は民族的武力抵抗の過程を通じて設立され、プロレタリアートの指導権の下に設立される」と述べているところからみても、国民党の「指導権」は第一次統一戦線時とは異なって力の弱いものとなっていた。さらに、資本主義か社会主義かの選択に当たっては、「中国のプロレタリア党としては、

断固後者の方に向わざるを得ない」とも述べていた¹⁴³⁾。

しかし、1938年10月の毛沢東の声明の中では、このような制限は一切見られなくなっている。ミュンヘン条約の締結後、中国のコミュニストたちは、この時点におけるモスクワの最重要課題である日中戦争が続く間、党の独立を除いては、一切のものを犠牲にするつもりになっていた。同年12月の政治局会議で王明は、当面の戦略方針として「抗日」に優先順位をおいた可能な範囲での「民主」の実現、すなわち「ブルジョア民主主義」の部分的遂行と位置づけ、「ソヴェト革命」に回帰することで「社会主義革命」に移行すると考えていたのである¹⁴⁴⁾。

12. 独ソ条約と毛沢東の「新民主主義」論

戦争突入後の最初の二年間、中国共産党は、日本の侵略者に対する戦いで国民党政府とよく協力した。彼らは当初の約束通りに完全に蒋介石に服従したわけではなかったが、友好関係を最高度につくるためにたしかに真剣な努力をしていた。この期間中、ソ連の支配者たちは、国民党政府に対して比較的大きな軍事援助を与えていた。1937年8月、一億円の借款を与えた外に、1938年10月には、両国間に「最初の一連の借款と、パートナー協定」が調印された。『エル・カンペシノ』誌によれば、中国コミュニストの将校がひそかにモスクワで訓練を受けていたが、ソ連の物資はもっぱら国民党政府に対して送られていたという¹⁴⁵⁾。

1939年のスターリンとヒトラーとの条約は、西側に対するモスクワの力を強化した。それは日本による攻撃の危険性をも減少したものの、クレムリンは、日本に対する中国の戦いを止めさせたくはなかった。ウィットフォークルが指摘したように、モスクワは明らかに、「日本を中国に釘付けにしておく方がより安全であることを知っていた」のである。したがって、「中国のコミュニストたちは、独ソ条約のあとも、国民党政府と手を切らなかった。

1938年に重慶で開かれた、はじめの三回の政治協商会議に出席した彼らは、1939年9月9日から18日まで開かれた第四回会議にも出席した。そして、引き続き抗日軍事活動を行なったのである¹⁴⁶⁾。

だが、新たな状況はもはや独ソ不可侵条約締結前と同じものではなかった。中国共産党は、重慶国民党政府の任命した行政官の管轄区域を占領して、政治的、軍事的支配を盛んに拡大するようになった。この条約の成立前にも、紅軍と国民党軍との衝突が若干はあったものの、いまやこのような衝突がますます頻繁に、かつ深刻になっていった。当時、中国にいたアンナ・ルイス・ストロングは1940年、「1939年末、最初の重大な軍事衝突が起った」と報告している¹⁴⁷⁾。一般的に共産党に同情的であった孫科も1940年12月、中国共産党の「無法な拡張主義」について不平をもらしていた。

ウィットフォーゲルの見るところ、毛沢東が独ソ不可侵条約締結後、国際情勢は新しい段階に入ったと述べたのは、その明白な変化の状況をそのまま口に出したに過ぎない。1939年9月1日に行なわれた談話で毛は、英国とフランスの政府はドイツとイタリアの例にならってますます反動的になり、自分たちの国にファシスト的国家組織を持ちこむために、戦時動員を利用していると指摘した¹⁴⁸⁾。「ドイツはその反コミンテルン政策を放棄したのだから」、彼らのいう新ファシストの西欧諸国に比較すれば、それ程反動的な国ではなく、したがって、「今や世界反動の中心は英国に移った」というのである¹⁴⁹⁾。

1939～40年の冬に書いた「新民主主義論」のなかで毛沢東は、西欧諸国について、さらにつっこんだ論評をしている。彼は「資本主義諸国にはもはや民主主義の息吹きはない」と主張して、「このような偽物、西側の帝国主義者」と同盟することを拒否している。

毛沢東が「新民主主義論」を書いた時、ソ連の国際的地位は大いに改善されていた。中国共産党は、表面的にはなお国民党政府と同盟する立場をとっていたが、彼は今や、かなり卒直に共産党の目的を表に出していた。ミュン

ヘン条約後、毛沢東は共産党がはっきりと社会主義の特徴をもつ「新」民主主義をめざすと考えていた。ミュンヘン条約後も毛は、反帝国主義闘争における国民党の指導権を完全に認めていたが、その引用する言葉の枠そのものを変えるに至る。彼はいまや、抗日闘争を、コミュニスト（プロレタリアート）の指導権をとまなう、一種の「ブルジョア民主主義」革命に結びつけたのである。「新民主主義」という言葉で彼がいおうとしたのは、まさにこのことであった。

毛沢東によれば、古いブルジョア民主主義革命は、ブルジョアジーに指導される革命であり、その革命は「資本主義社会とブルジョア独裁の国家を作ることを目的としており、「古い型のブルジョア民主主義世界革命」の一環をなすものであった。これに対して、新しい「ブルジョア民主主義」革命は、「プロレタリアートによって指導され、新しい民主主義社会と、すべての革命的階級の共同的独裁による国家を作ることを目的とする」ものである。この革命は、「社会主義への発展に向っての、正しい道を広く開くのに役立つ」。そしてもちろん、この革命は、「プロレタリアートの世界革命の一環をなすもの」である¹⁵⁰⁾。だがそれは、ウィットフォーゲルにとっては、「ソ連の教義に通暁しているものならだれにでも、この構想が實質上 1905 年はじめ、レーニンによってはぐくまれ、スターリンとコミンテルンによって、中国の実情に合うよう必要な調整がなされたものであることが分かる」といった類いの、単なる二番煎じであるにすぎない。

ところが、毛沢東はこの新しい民主主義のテーゼがソ連製のものであることを十分知っていたし、またそのことを隠そうともしなかった。彼はいとも簡単に、「中国共産党が提案したこの正しいテーゼは、スターリンの理論に基づいたものである」と認めている¹⁵¹⁾。スターリンはこれを、すでに「1918 年から」提唱していて、「再三再四、植民地、及び半植民地における革命はすでに旧来の範疇を脱して、プロレタリア社会主義革命の一部になっているとの理論的立場を説明している」¹⁵²⁾。だが、ウィットフォーゲルの見

るところ、ここには権力によるきわめて重大な操作が施されている。

「このテーゼが元来ソ連製のものであることを毛沢東が率直に認めたことから見ても、『ドキュメント中国共産党史』の著者たちが、なぜ毛沢東のパンフレットを『マルクス・レーニン主義理論へのまったく新しい寄与であり、中国に起源を發し、恐らくその著者である毛沢東をマルクス主義の偉大なる理論家の上位においた』と呼べるのかと理解に苦しむ。もっと理解に苦しむのは、彼らが行なった毛沢東のパンフレットから『選集』への編纂における諸節の提起の仕方である。『新民主主義論』から選ばれた箇所を公表する（完全に正当である）にあたって、彼らは中国語のテキストの九頁から一三頁までを除外した（これも正当である）。しかし彼らは、『以上の点から見て、二つの種類の世界革命があるということが明らかである』という一三頁の文章から翻訳をはじめるとあたって、毛沢東は実際には、そのテーゼの要点でもあるスターリンの言及をながながと引用しているだけであるにもかかわらず、毛沢東がこの文章で『新』民主主義の性格を鮮明にしたという印象をつくりだしたのである」¹⁵³⁾。

このように、『文献史』の著者たちは、毛沢東による「新民主主義論」の「獨創性」(originality)を持ち上げるために、毛沢東自身によるスターリンについての言及をあえて除外していたことが分かる。また彼らの編集方針は、明らかに毛沢東をスターリンから切り離し、中国独自のものであるとの印象を強めようとするものであった。だが、ウィットフォーゲルによれば、毛沢東の「新民主主義論」については、そのテーゼの「獨創性」ではなく、これが提唱された時の客観情勢と、その客観情勢への毛沢東の対処の仕方こそが重要なのである。毛沢東はいまや再び、中国共産党が国内発展の「主導権」をとろうと努めていること、及び「ブルジョア民主主義」共和国は、社

会主義とプロレタリア独裁への道の単なる「途中下車駅」に過ぎないという新たな主張を掲げて、第二次統一戦線の結成以前に述べていた問題をここでも繰り返したのである¹⁵⁴⁾。

「毛沢東は、第二次統一戦線の最初の頃唱えていたように、なお孫文の三原則を引用した。しかし彼はもう『三原則による共和国』を主張しなくなっていた。それどころか、彼はいまや、孫文の綱領とマルクス・レーニン主義の主張との類似性を説いたばかりでなく、同時に、しかも鋭く、両者の相違点を指摘した。彼は、孫博士の三原則を認めるように見えるときでも、それをはるかに凌いでいた。孫博士が『銀行、鉄道、航空』を、国家が運営することになる型の大企業として取り上げたのに対して、毛沢東は『共和国は大銀行、大工業及び大商業を所有する』と主張した。また孫博士が、『耕す者に土地を』与える政策で、前の土地所有者に対して補償する計画を立てていたのに対して、毛沢東は『地主の土地を没収する方法』を主張したのである」¹⁵⁵⁾。

かくして、ここでもまた、「アジア的復古」はきわめて巧妙な論理のすり替えによって、見事に達成されることとなった。ウィットフォーゲルによれば、当時のような中国のイデオロギー的、政治的風潮のもとでの「三原則」に対する毛沢東の言及は、中国の小党派の一部のものの心をやわらげるのにたいへん役立っていた。それは多くの知識人、実業家、及び国民党員の反対さえも緩和したのである。しかし、ウィットフォーゲルは、「孫文の見解のこの奇妙な仕上げを受け入れた人たちでさえも、毛沢東の主張が1938年10月以来大きく変わったことに気付いていたにちがいない」と指摘する¹⁵⁶⁾。なぜなら、そこにはもはや、統一戦線が最大の関心事であるという強調も、「国民党の指導権」に対する喝采も、経済や政治の重要な問題への慎重な取り組みもことごとく消えていたからである。いまや、中国のブルジョア階

は、再び「腰抜け」として嘲笑され¹⁵⁷⁾、ブルジョアジーと「彼らの」党である国民党との以前の衝突が、詳細に「研究」されている。その結果、抗日戦争で統一戦線を継続することの必要性は、ほとんどいわれなくなった。ウィットフォーゲルによれば、「その代りに毛沢東は、プロレタリアの指導権を強調するとともに、新民主主義経済のもつ高度の社会的要素を示して、プロレタリアートの指導のもとに行なわれる新民主主義共和国の国営企業は、社会主義的性格を有し、国民経済全体の指導力となる」と公言するに至ったのである¹⁵⁸⁾。

1939年の秋、毛沢東が「新民主主義論」を書いている時、中国共産党は新しい党の機関誌『共産党人』を刊行しはじめたが、毛沢東は同誌のために「序言」を書いていた。その中で彼は、いまや「ポリシェビキ化」しつつある中国共産党は、「狭い境界から踏み出して、国家的規模の大政党になった」と述べた¹⁵⁹⁾。1940年2月から党が発行することとなったもう一つの雑誌『中国工人』では、毛沢東ははっきりと、「中国の労働者は、われわれの政党である中国共産党の指導のもとに、中国革命の指導者になった」と記した¹⁶⁰⁾。

かくして、「ブルジョア」国民党から公然と別れ、重慶の支配する地域に積極的に浸透していったコミュニストたちは、もはや中央政府という最高権力の水準でも国民党と協力することに興味をもたなくなっていた。ソ連が1941年3月、日本と不可侵条約を締結する間際になると、中国共産党はすでに統一戦線の政治的枠組みである政治協商会議にも出席しなくなっており、その政治的基本姿勢としては、むしろ「新民主主義」とは逆の方向へと歩みつつあったのである。

こうしたなか、ソ連がスターリングラードで勝利を収めた後、中国共産党は再び純粋な統一戦線に対する興味を失っていき、また中国共産党の政治的立場は、1943年5月のコミンテルンの解散によって、さしたる影響も受けなくなっていた。それゆえにウィットフォーゲルは中国共産党の軍事勢力の拡大について、次のようにコメントする。

「われわれは、1939年以來、陰に陽にその領域を拡大してきた中国の коммуニストが、戦争の終り頃には、国民党政府に対する重大な軍事的、政治的脅威になっていたとしても、あえて驚くにはあたらないであろう。彼ら自身の説明によれば、1935年の暮れ、陝西に到着したときには三万に足りなかった彼らの正規軍は、1944年10月には四七万五千、1945年夏には九〇万以上になった。この他に彼らは二〇〇万以上の民兵を持っていた。これらの資料を伝えた米国の情報は、戦争の末期には、 коммуニストの占領地域における共産党の人気が、国民党の占領地域における国民党の人気よりも良いことに注目していた。このことは、 коммуニストたちが、扇動的に村人たちの共感を得る条件を作っていたので、十分に理解できる」¹⁶¹⁾。

中国共産党は、こうした軍事的勢力の拡大によって、多大の利益を収めたが、また多大の困難にも当面した。つまり、彼らの軍は主としてゲリラ軍であって、正規軍の訓練と装備を欠いていた。彼らは、二人の兵士について一挺そこそこの割合でしかライフルを持っていなかったし、またほとんど重火器をもっていなかったのである。それゆえに、ウィットフォーゲルは、「もし彼らがこの状態に据え置かれていたら、恐らく彼らは政府軍に打ち勝つことができなかつたであろう」と見る¹⁶²⁾。だが、終戦の直後に起つた、以下で見るような満州での新事態は、 коммуニストたちによるこれらの欠陥の克服を可能にしていった。

13. 「社会主義」国家としての執政党への道 (1945-1949年)

日本の抵抗が潰えた時、モスクワも延安も、じつは共産党の早期の勝利を期待してはいなかつた。スターリンとその同志は終戦の直後、「中国の同志」をモスクワに招いたとされる。ユーゴスラビア側の説明によれば、1948年

にスターリンは当時を回想して、「われわれは彼ら（中国共産党一筆者）に対して、中国における蜂起の発展は期待できないから、中国の同志たちは蒋介石と『暫定協定』を結び、蒋介石政府への参加と自軍の解散を考慮すべきだと無遠慮に告げた」という¹⁶³⁾。これに対してウィットフォーゲルは、この情報が伝聞に基づくものとはいえ、「われわれはそれが、まったく無価値であるとして棄て去るべきものではない」と指摘する。ウィットフォーゲルの見るところ、「中国の内戦で米国との公然たる衝突に巻き込まれる恐れがあると考えていたスターリンが1945年、中国における内戦に反対したというのは、まったくありそうなことである」¹⁶⁴⁾。たしかにスターリンは、交渉によって多くのものを入手したいと望んでいる国と衝突することを欲しなかったし、「公然たる革命」によらず、コミュニストに支配の機会をもたらす挙党連立政府組織を東欧全般に推進していたので、最終的には同様の戦略が中国においても成功すると信ずるだけの理由があったのである。それゆえにウィットフォーゲルは、蒋介石政府への参加と妥協の背後には、ここでもまた、依然としてスターリンの影が見え隠れしていると指摘する。

「たしかに、中国のコミュニストに対してスターリンが軍隊の解散を勧告したというのは誤伝であろう。われわれは戦後の重要な時期に、満州のソ連軍司令官であったマリノフスキーが、当時彼の占領地域内において行動していた延安共産軍の解散に反対した事実を知っている。われわれはまた、マリノフスキーが同地の共産部隊と合流したこの軍隊に、相手の正規軍と戦うことができるような装備と訓練の機会を与えていたことも知っている。彼がこのようなことをしたのは、スターリンの命によるものであったことは間違いない。1937年のときのように、スターリンが紅軍に偽りの『解散』をさせるよう提案したことは、あり得ることである。それはコミュニストを中国の連立政府内に送り込む計画に適したものであった」¹⁶⁵⁾。

こうした背景のなか、中国共産党は、この辺りからスターリンとの距離を取り始めていた。中国のコミュニストは、中国に帰ってまったく反対のことをしたのである。すなわち、彼らはその政治勢力を集結し、軍を組織し、1948年には、蒋介石の軍を打破しつつあった。これに対してスターリンは、「今日、中国の問題については、われわれが誤っていたことを認める。正しいのは中国の同志たちであって、ソ連の同志でないことが分かった」と述べたとされる¹⁶⁶⁾。こうしたスターリンによる言葉も、ウィットフォーゲルの見るところ、「半分くらいは本当なのかもしれない」が、「事実と符合しない」。なぜなら、中国のコミュニストたちは、モスクワから独立して、その軍隊を組織したのではないし、また蒋介石の軍隊に対して直ちに全面戦争を開始したわけでもないからである。1947年のはじめまで、中国共産党は国民党政府とたしかに交渉していたのである。また1946年末には、毛沢東自身がおアンナ・ルイス・ストロングに対して、共産党が中国において勝利を収めるためには、今後二十年はかかるであろうと語っていた¹⁶⁷⁾。ここでもまた、ウィットフォーゲルの分析が、どこまでもモスクワとの距離関係において行なわれていたことはいうまでもない。

「スターリンの1945年の指令を無視するどころか、毛沢東は共産党の要求するようなある種の連立政権に南京が同意しないことが明らかになるまでこれを実行したし、その後、武器をとったのは蒋介石であって、毛沢東ではなかった。続いて起った内戦では、最初のうち共産党は散々敗北した。彼らが最後の勝利を収めた原因はたくさんあるが、その最も重要な原因は、共産党の軍隊が貧弱な装備のゲリラ隊から、十分な装備の正規軍に生れ変わったことである。この再編はソ連の満州における政策が可能にしたのであって、この政策は、単に共産軍を築きあげただけでなく、満州における国民党軍の行動を散々妨害したのである」¹⁶⁸⁾。

このように、毛沢東をはじめとする中国のコミュニストらは、中国共産党の「正統」史観によってしばしば描かれてきたように、モスクワから独立して軍を組織していたわけでもなければ、抗日戦争の終結後、直ちに国民党との全面戦争に突入しつつ、共産党の優位のままで戦局が推移していったわけでもない。もちろん、このことは、モスクワだけが国共内戦を方向付ける要因のすべてであったことを意味しない。実際、中国の国内条件や米国の政策といった他の周辺的要因もまた、戦後の中国の推移にとっては重要であった。だが、ウィットフォーゲルはここでもまた、中国共産党にとっての「支配の正当性」が、第一義的にはモスクワから調達されたものであるという結論を引き出している。すなわち、「このような要因がどのような比重を持っていたとしても、中国共産党をして、われわれの時代に第二番目の全体主義国を作らせるに至った1940年代の運命的なできごとで、モスクワが決定的な役割を演じたことは明らかなのである」¹⁶⁹⁾。

おわりに

これまで見てきたように、1927年の危機を経た中国の政治過程では、労働者を中心とする本来の労農同盟の理念がすでに根源的に崩壊していたからこそ、「プロレタリアート」という名を借りたコミュニストらに指導された「農民の戦争」は新たな領域に拡大し、やがて政治的、工業的中心部を占領するという新たな革命戦略の提示が可能になった。実際、コミンテルンの中央委員会政治局は1930年7月、すでに革命の主体を「労働者」にではなく、「農民」にこそ求めはじめていたのである。

すでにこの時点でコミンテルンは、「労農同盟」の本来のあり方を自ら否定したばかりでなく、前近代的農民の論理で近代的労働者（bürger=市民）の居住する都市を占領しようとしていた。ウィットフォーゲルが指摘したように、共産党の戦略家たちは、1930年には、1927年の終りから1928年にか

けてとっていたような、「あれかこれか」の路線をとってはいなかった。すでにこの時点で、「農村ソヴェト」をめぐるコミンテルンの「迷い」は、すっかり払拭されていたように見えた。こうしたコミンテルンの動向を踏まえてこそ、毛沢東はレーニン・スターリン主義の戦略を、レーニンもスターリンも実地に経験したことのない新たな環境、すなわち「農村」での諸条件に応用したのである。毛沢東は1928年10月、中国のブルジョア民主主義革命が、「プロレタリアートの指導の下においてのみ完成される」と主張しつつ、「小さな赤の地域」としての農村の根拠地こそが、究極的には全国的な政治権力を獲得するとの展望を表明した。農村の根拠地にいた間の毛沢東は、「農村地域における独立かつ隔離したソヴェト運動の発展」(シュウォルツ)を考えていたという推測とはまったく逆に、共産主義運動が全国的規模で推進されるという近い将来の日々に思いを馳せていたのである。たしかに毛沢東は都市のブルジョアの果たすべき役割を放棄したわけではなかったが、ここで重要なのは、労農同盟崩壊後の毛沢東の戦略が、すでに都市の労働者とブルジョア(市民)を中心とした「労農同盟」としてではなく、農民を中心として、むしろ実質的には労働者をはじめとする都市の「ブルジョア(市民)」を従属的な立場に置く「農労同盟」に変貌していた、ということである。だが、これは明らかに実質的な「ブルジョア民主主義」革命の否定であり、ブルジョア(市民)が依拠すべき「近代的」価値そのものの否定であった。

たしかに毛沢東は、農民の力が労働者のそれよりも強くなるのが革命にとって有害であるとする考えを誤りであるとしていた。だが、ウィットフォーゲルにとって、これは実質的には、労働者階級の「指導権」を農民に与えることによって、「半植民地」中国における革命を、「アジア的」=「前近代的」遺制の克服のないままに展望したことを意味している。このように毛沢東は、本来の「労農同盟」の理念とはまったく逆に、やがて労働者の「指導権」を農民に与えることによって、農民を中心とする「プロレタリアの指導」を「農労同盟」として正当化したのである。

たしかに、中国ソヴェトの指導者たちは、土地革命の支持者の大部分が農民であることを率直に認めた。また、農村ソヴェト政府においてはもちろん、地方の党組織においても、農民が圧倒的に多いことも認めていた。なぜ彼らが、農村ソヴェトは労働者に指導されていると主張したのかといえば、それは彼らが、純粋に理論的なものよりもむしろ政治的な理由でそれを強調していたからである。新しい統一戦線を結成する必要がより緊要となるにつれて、中国共産党は、国民党の幹部たちからひどく嫌われていることを悟ったがゆえに、彼らの「革命的土政策」の放棄の用意のあることを繰り返し公言しただけに過ぎない。だが、このことは逆に、中国共産党こそが「革命的土改革」の実施という究極的な政策カード、つまり「下から」の権力のよりどころを握っていたことを意味している。

毛沢東は「新民主主義論」（1940年）において、表面的にはなお国民党政府と同盟する立場をとっていたが、ミュンヘン条約後ははっきりと「ブルジョア（市民）的」でなく、「社会主義的」特徴をもつ「新」民主主義をめざすと考えていた。その後も表面的には、反帝国主義闘争における国民党の指導権を認めていたものの、毛沢東は抗日闘争をコミュニスト（プロレタリアート）の指導権をとまなう「ブルジョア民主主義革命」に結びつけたのである。かくして毛沢東は、いまや再び、中国共産党が国内発展の主導権をとろうと努めていること、及びブルジョア民主主義共和国は、社会主義とプロレタリア独裁への道の単なる「途中下車駅」に過ぎないという新たな主張を掲げていった。毛沢東は、孫文の綱領とマルクス・レーニン主義の主張との類似性を説いたばかりでなく、同時に両者の相違点を指摘しつつ、孫文が「耕す者に土地を」与える政策で、前の土地所有者に対して「補償する」計画を立てていたのに対して、毛沢東は「地主の土地」を「没収する」方法を主張したのである。つまり、ここでもまた、かつてプレハーノフが警告していた「アジア的復古」は、きわめて巧妙な論理のすり替えによって見事に達成されたといえる。そこにはもはや、統一戦線が最大の要件であるという主張も、国

民党の指導権に対する喝采も、経済や政治の重要な問題への慎重な取り組みもみな消えていた。いまや、中国のブルジョアジーは、再び厳しい批判の対象となり、ブルジョアジーの党である国民党との以前の対立が、1938年10月を境にかつて以上に強調されていったのである。

ソ連が1941年3月、日本と不可侵条約を締結する間際になると、その政治的基本姿勢としては、むしろ「新民主主義」の理念とは反対の方向へと歩んでいた。すでにコミンテルンが解散されていたとはいえ、これ以降、1945年の抗日戦争の終結から1949年までの国共内戦へと至る政治過程の背後にあったのは、依然としてスターリンのソ連であったことはいままでもない。かくして、かつてソ連の成立としてそれが定着していったように、1949年の中華人民共和国の成立とともに、「近代的なもの」が大きく後退し、「アジア的復古」が新たな中国「社会主義」国家体制として成立していったのである。

《註》

90) *Ibid.*, p. 1754 cited in *ibid.*

91) Karl August Wittfogel, *ibid.*, p. 1192.

92) Wang Ming, "Fifteen Years of Struggle for the Independence and Freedom of the Chinese People," *Communist International*, No. 9, Sept.-Oct., 1936, p. 586 cited in *ibid.* 王明(陳紹禹)「中華民族独立自由のための十五年間」, 波多野乾一編『資料集成中国共産党史』(時事通信社, 1961年)第6巻, 667-668頁。

93) P. Miff, *Heroic China*, New York, 1937, p. 88 cited in *ibid.*, pp. 1192-93.

94) Hu Chiao-mu, *op. cit.*, p. 33 cited in p. 1193. 前掲『中国共産党の三〇年』, 44頁。

95) Karl August Wittfogel, *ibid.*

96) *Ibid.*

97) このことは、フランスにおける統一戦線が、人民戦線、統一戦線政府、人民戦線政府という運動と政策の発展を促し、コミンテルンの政策を「政策体系の転換」にまで深めていたことを示唆している。この会議での工作は、ディミトロフを中心に1934年5月から実際に本格化するが、これを契機にそれまでの社会民主

- 義への評価が維持できなくなり、人民戦線政策や「ブルジョア民主主義」に対する評価のように、他の領域へも争点が拡大し、またコミンテルン組織の存在形態そのものをも転換するという方向性が定まっていた。この周辺の事情については、加藤哲郎『コミンテルンの世界像』（青木書店、1991年）、373-375頁を参照。
- 98) *Inprecor*, 1935, p. 971ff cited in Karl August Wittfogel, *ibid.*, p. 1194. 中国社会科学院近代史研究室翻译室『共产國際有关中国革命的文献資料：1929-1936』（中国社会科学出版社、1981年）、392頁。
- 99) *Ibid.*, p. 1489 cited in Karl August Wittfogel, *ibid.*, pp. 1194-95. 同 403-404頁。
- 100) *Ibid.*, p. 1659 cited in *ibid.*, p. 1195. 同 419-420頁。
- 101) *Ibid.*, p. 1666 cited in *ibid.* 同 421-423頁。
- 102) Karl August Wittfogel, *ibid.*, p. 1195.
- 103) *Inprecor*, 1935, p. 1597 cited in Karl August Wittfogel, *ibid.*
- 104) Karl August Wittfogel, *ibid.*
- 105) Edgar Snow, *op. cit.*, p. 191ff cited in Karl August Wittfogel, *ibid.*
- 106) Edgar Snow, *ibid.*, p. 387 cited in *ibid.*, pp. 1195-96.
- 107) Karl August Wittfogel, *ibid.*, p. 1196.
- 108) *Ibid.*
- 109) Mao Tse-tung, *op. cit.*, vol. 1, p. 155ff and pp. 169-170 cited in Karl August Wittfogel, *ibid.* 毛沢東「日本帝国主義に反対する戦術について」、前掲『毛沢東選集』第一巻、236-237頁。
- 110) *Inprecor*, 1936, p. 378 cited in Karl August Wittfogel, *ibid.*, p. 1197.
- 111) Edgar Snow, *op. cit.*, p. 46 cited in Karl August Wittfogel, *ibid.*
- 112) Karl August Wittfogel, *ibid.*
- 113) *Ibid.*
- 114) *Ibid.*
- 115) Mao Tse-tung, *op. cit.*, vol. 1, p. 254 cited in Karl August Wittfogel, *ibid.*, pp. 1197-98. 毛沢東「蔣介石の声明についての声明」（1936年12月28日）、前掲『毛沢東選集』第二巻、125頁。
- 116) Karl August Wittfogel, *ibid.*, p. 1198.
- 117) Mao Tse-tung, *op. cit.*, vol. 1, p. 269ff cited in *ibid.*, p. 1199. 前掲『毛沢東選集』第二巻、150頁。
- 118) *Ibid.* 同。
- 119) *Ibid.* 同 150-151頁。
- 120) *Ibid.*, p. 298 cited in Karl August Wittfogel, *ibid.* 毛沢東「矛盾論」、前掲『毛沢東選集』第二巻、228頁。
- 121) *Ibid.*, vol. 2, p. 109ff cited in Karl August Wittfogel, *ibid.* 毛沢東「上海・

太原陥落後の抗日戦争の情勢と任務」(1937年11月12日), 同第三巻, 79頁以下参照。

- 122) William L. Langer, *An Encyclopedia of World History*, Rev. ed., Boston, 1948, p. 1036.
- 123) Karl August Wittfogel, *ibid.*, pp. 1199-1200.
- 124) Mao Tse-tung, *The New Stage, Report to the Sixth Enlarged Plenum of the Central Committee of the Communist Party of China*, New China Information Committee, Chungking, Hongkong, 1938, pp. 60-61 cited in *ibid.*, p. 1200. 毛沢東「新段階を論ず——中共六期拡大六中全会における政治報告」(1938年10月12-14日), 日本国際問題研究所中国部会編『中国共産党史資料集』第9巻(勁草書房, 1974年), 350頁。
- 125) Mao Tse-tung, *ibid.*, p. 36 cited in *ibid.* 同, 328頁。
- 126) *Ibid.*, p. 11 cited in Karl August Wittfogel, *ibid.* 同, 293-294頁。
- 127) *Ibid.*, p. 29 cited in *ibid.*, p. 1201. 同 320頁。
- 128) *Ibid.*, p. 21 cited in *ibid.* 同 293頁。ただし, この部分は邦訳では確認できない。
- 129) *Ibid.*, p. 29 cited in *ibid.* 同 320頁。
- 130) *Ibid.*, p. 21 cited in *ibid.* 同 293頁。
- 131) *Ibid.*, p. 49 cited in *ibid.* 同 338頁。
- 132) *Ibid.*, p. 55 cited in *ibid.* 同 340頁。
- 133) *Ibid.* 同 344頁。
- 134) *Ibid.* 同。
- 135) Karl August Wittfogel, *ibid.*
- 136) *Ibid.*
- 137) Mao Tse-tung, *The New Stage, Report to the Sixth Enlarged Plenum of the Central Committee of the Communist Party of China*, p. 57 cited in Karl August Wittfogel, *ibid.* 前掲『中国共産党史資料集』第9巻, 346頁。
- 138) Mao Tse-tung, *ibid.*, pp. 58-59 cited in *ibid.* 同 348頁。
- 139) この電文の内容とは以下の通りである。「わが国の国家的存在が危険にさらされたことを看取された貴下は, 不退転の決意をもって, 国民の団結を達成し, 日本帝国主義に甚大な打撃を与え, われわれの最終的勝利と国家再建の基礎を確立した長期抗戦へと全国民を導かれた。わが党の第六回中央委員会総会は, わが頭脳明晰なる国家の指導者に対して, ここに衷心よりの挨拶を送るものである。わが総会の期間中, われわれは, この戦争で成果を挙げるためにわれわれが遂行すべき長期抗戦政策の明瞭な青写真をわれわれに与えてくれた, 貴下の『国民に対する宣言』を読んだ。貴下のこの宣言は, 悲観論者や妥協主義者に痛烈な打撃を与え, 国民の心に新たな勝利への自信を起させた。わが党は, 貴下の宣言に全面

的に賛同し、その支持を心から誓うものである。わが党は、防禦の段階から攻撃の段階に移行する、この中間期の困難が避けられないことをよく知っている。しかし、過去十六カ月間の戦いが示しているように、中国は前例を見ないほどの成果を挙げ、進歩をとげることができた。中国の全人民は、貴下の不退転の指導と、国民党、共産党、その他の政党の強い協力の下に、抗戦を堅持して、民族の団結を強化拡大するであろうことを信じて疑わない。それと同時に、われわれは、軍事問題、政治組織、大衆運動の改善計画を採用することと、敵の侵略を阻止し、抗戦力を強化し、戦争の第三段階を画する反撃への新たな力を準備するための国力の動員に向けて、その最善の努力を尽すこととによって、必ずや前進することができる。われわれは、大衆闘争を通じて形成された偉大なる中国国民が、完全に団結して、抗戦の困難を克服し、勝利の終局の目的を達成することを信じる。中国共産党は、すでに言明した政策を堅持し、われわれの国家指導者に対する衷心よりの支持を誓う。われわれは、国家の再建と抗戦計画の政治的基礎として、孫文の三原則への信頼を再確認すると共に、わが党の全党員に対し、敵に対して最終的勝利を収め、民主主義国家を建設するために、彼らが相互援助と、寛容と尊敬の精神をもって、まず両党間の協力を強化し、ついでこれを全国民に及ぼすことを、再び勧告している。終りにのぞみ、全国民の名において、われわれは、貴下がますます健康であられんことを希望すると共に、国民党中央委員会の各位に対してわれわれの挨拶を送るものである」(New China Information Committee, *Resolution and Telegrams of the Sixth Plenum Central Committee, Communist Party of China*, November 6, Hongkong 1938, p. 11ff cited in Karl August Wittfogel, *ibid.*, p. 1202)。

- 140) New China Information Committee, *ibid.*, p. 12 cited in Karl August Wittfogel, *ibid.*, p. 1203.
- 141) *Ibid.*, p. 14 cited in Karl August Wittfogel, *ibid.*
- 142) Karl August Wittfogel, *ibid.*
- 143) Mao Tse-tung, *Selected Works*, vol. 1, p. 265 cited in *ibid.* 毛沢東「抗日の時期における中国共産党の任務」, 前掲『毛沢東選集』第二巻, 153頁。
- 144) 前掲『1930年代中国政治史研究』, 190-191頁参照。
- 145) El Campesino, *Life and Death in Soviet Russia* by Valentin Gonzalez and Julian Gorkin, trans. Ilsa Barea, Lion Book: New York, 1953, p. 41 cited in Karl August Wittfogel, *ibid.*
- 146) Karl August Wittfogel, *ibid.*, pp. 1203-04.
- 147) Anna Louise Strong, "The Kuomintang-Communist Crisis in China," *Amerasia V*, No. 1 (March 1941), p. 15 cited in *ibid.*, p. 1204.
- 148) Mao Tse-tung, *op. cit.*, vol. 3, p. 33ff cited in *ibid.* 毛沢東「国際情勢についての新華日報記者にたいする談話」, 前掲『毛沢東選集』第四巻, 102頁以下参

照。

- 149) Edgar Snow, "Interviews with Mao Tse-tung," *China Weekly Review*, no. 91, 1940, p. 377ff cited in *ibid.*
- 150) Mao Tse-tung, *op. cit.*, vol. 3, pp. 110-111 cited in *ibid.*, p. 1205. 毛沢東「新民主主義論」(1940年1月), 前掲『毛沢東選集』第五巻, 18-19頁。
- 151) *Ibid.*, pp. 111-112 cited in Karl August Wittfogel, *ibid.* 同20頁。
- 152) *Ibid.*, p. 113 cited in *ibid.* 同。
- 153) Karl August Wittfogel, *ibid.*
- 154) *Ibid.*, p. 1206.
- 155) *Ibid.*
- 156) *Ibid.*
- 157) *Ibid.*
- 158) *Ibid.*
- 159) Mao Tse-tung, *op. cit.*, vol. 3, p. 63 cited in *ibid.*, p. 1207. 毛沢東「『共産党員』発刊の辞」, 前掲『毛沢東選集』第五巻, 135頁。
- 160) *Ibid.*, p. 175 cited in *ibid.* 毛沢東「『中国工人』発刊の辞」, 同第四巻, 103頁。
- 161) Karl August Wittfogel, *ibid.*
- 162) *Ibid.*, p. 1208.
- 163) V. Dedijer, *Tito*, New York, 1953, p. 323 cited in *ibid.*
- 164) Karl August Wittfogel, *ibid.*
- 165) *Ibid.*, pp. 1208-09.
- 166) V. Dedijer, *op. cit.*, p. 322 cited in *ibid.*, p. 1209.
- 167) Anna Louise Strong, *The Chinese Conquer China*, Garden City and New York, 1949, p. 43ff cited in Karl August Wittfogel, *ibid.*
- 168) Karl August Wittfogel, *ibid.*
- 169) *Ibid.*

(いしい・ともあき 商学部教授)